

鷺森別院蔵／二尊像の意味

鷺森別院に、文明八年親鸞聖人・蓮如上人連座像（二尊像）がある。聖人像あるいは上人像としても、とともに県内最古のものである。

最新の見解は、草野顯之氏『蓮如上人研究会会誌』六号（平成四年）に見られる。

同氏は、裏書の筆致・墨色の相違に注目し、（一）文明八年に、富田坊（教行寺）に安置された（二）富田坊に安置御影の模本が安置されることになり、二尊像は、明応七年「紀伊国阿間郡／清水道場」の了賢へ授与された、

と推論した。説得力のある見解で、賛意を表したい。

A black and white photograph of a seated Buddhist figure, identified as Jigen, in a traditional wooden shrine setting. The figure is dressed in traditional clerical robes and is seated on a high, ornate throne. The background features intricate carvings and decorations typical of a Japanese Buddhist temple interior.

うちで御坊化したのも、この清水道場だけだからである。この難問を解く鍵は、やはり、二尊像それ自体に求めるのが自然であろう。

三十例の中でも唯一この連座像のみが、蓮如上人から蓮如上人へ与えられたものだった、という点が重要なのである。了賢没後の後継者不在のなか、近在の有力門徒たちが結集し、連座像の中の蓮如上人を護持し続けた。たとえ宗主一族はおらずとも、何よりもこの二尊像の中で、没後も蓮如上人はなお常住し続いている。

その種の主張・認識を実如上人が共感・共有した時、冷水坊・黒江坊・鷺森坊は、戦国期教団のかで唯一の、稀なる「御坊」へと変身を遂げるに至ったのだ。

「蓮如上人と紀州」

金龍 靜

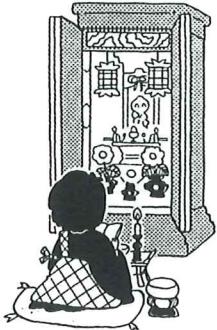


発行 和歌山教区基督教運動推進委員会
編集 教区報編集委員会
和歌山市鷺森1番地
鷺森別院内
電話 和歌山(073)422-4677
FAX 和歌山(073)428-2450
発行人 佐々木孝昭

の道場がなぜ、冷水坊・黒江坊・鷺森坊という「御坊」への道を歩むことになったのかという点にある。当該期の御坊は、富田坊・出口坊の例のごとく、宗主一族が入寺しているところばかりである。しかし了賢は宗主一族でもなく、後

無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏：」と、『御文章』拝讀の時には誰も座っていないというような、やなあ：「ゴソゴソゴソ：」南

寿如來 南無不可思議光 法藏
：」と勤まつてしばらくしたら、後ろに座つて下さっているお方が「今日はこの後、病院へ行つて、帰りにあそこでバーゲンし



陀仏」と称えることあります。

阿彌陀さまは「必ず救う、わたくして、私の声にまでなつて、私は救われる」と申されます。しかし事のついでのお念仏ですから、「こんなお念仏ぐらいで救われるといわれても納得できない」というのが、本当のお気持ちではないでしょうか。

「お念佛」とは、「南無阿弥陀佛」と勤まつて下さります。

まことに粗末千万な、事のついたお念佛であります。阿彌陀真宗では「お念佛」一つで救われる」と申されます。しかし事のついでのお念佛ですから、「こんなお念佛ぐらいで救われるといわれても納得できない」というのが、本当のお気持ちではないでしょうか。

「お念佛」とは、「南無阿弥陀佛」と勤まつて下さります。

鷺森テレホン

紙上法話

田口 敏明

(和歌山教区 本願寺派布教使)

月参りのある風景であります。

「チーン。チーン。帰命無量寿如來 南無不可思議光 法藏

鷺森テレホン 法話

24時間いつでもどこからでも3分間法話
が聞けます。
(法話は毎月一日・十五日に変わります)
おにしさん

し(仏)を支えにして生きてい
つてくれよ」と「南無阿彌陀仏」
のお言葉の中に込めて下さいま
した。私が称えるお念佛は、私

た。阿彌陀さまは「必ず救う、わたくして、私の声にまでなつて、私は救われる」と申します。

阿彌陀さまは「必ず救う、わたくして、私の声にまでなつて、私は救われる」と申します。

阿彌陀さまは「必ず救う、わたくして、私の声にまでなつて、私は救われる」と申します。

わずか六文字・私を救う証

あかし

親鸞聖人は、「南無阿彌陀佛」の口から発した私の声であります。ですが、それこそ私ははらから、私の口をかりて、私の言葉になつて、私の声にまでなつて、私は救われる」と申されます。しかし事のついでのお念佛ですから、「こんなお念佛ぐらいで救われるといわれても納得できない」というのが、本当のお気持ちではないでしょうか。

の口から発した私の声であります。ですが、それこそ私ははらから、私の口をかりて、私の言葉になつて、私の声にまでなつて、私は救われる」と申されます。しかし事のついでのお念佛ですから、「こんなお念佛ぐらいで救われるといわれても納得できない」というのが、本当のお気持ちではないでしょうか。

うことが知らされるのです。阿彌陀さまと一緒の人生であつたから、苦しい時も悲しい時も一緒。病

楽しい時も嬉しい時も一緒。病

ら、苦しい時も悲しい時も一緒。

病のいのちの中で支え、今は

たらいて下さっている阿彌陀さ

まのはたらきの証の声として、

味わわせていただきたいもので

あります。

親鸞聖人は、「南無阿彌陀佛」の口から発した私の声であります。ですが、それこそ私ははらから、私の口をかりて、私の言葉になつて、私の声にまでなつて、私は救われる」と申します。

の口から発した私の声であります。ですが、それこそ私ははらから、私の口をかりて、私の言葉になつて、私の声にまでなつて、私は救われる」と申します。

うことが知らされるのです。阿彌陀さまと一緒の人生であつたから、苦しい時も悲しい時も一緒。病

楽しい時も嬉しい時も一緒。病

ら、苦しい時も悲しい時も一緒。

病のいのちの中で支え、今は

たらいて下さっている阿彌陀さ

まのはたらきの証の声として、

味わわせていただきたいもので

あります。

仏教壮年会連盟

現地研修会を実施

ハンセン病療養所

長島愛生園を訪ねて

内田 孝



真宗同朋会館でおつとめする参加者

教区仏教壮年会連盟では、去る二月二十日、ハンセン病国立療養所長島愛生園を訪問した。これは、壮年会活動の一環として現地学習を行つたもので、仏社会員ら二十八人が参加、事前に学習会も開催し、熱のこもつた有意義な研修会となつた。そこで、今回同研修会に参加した内田孝さん（和歌山組本弘寺門徒）にその内容と感想を執筆してもらつた。

去る二月二十日、仏教壮年会連盟の研修で、岡山県の国立療養所「長島愛生園」訪問に参加させていただきました。当日の朝、鷺森別院前でバスに乗車、JR和歌山駅で参加者が揃つて出発しました。この日の訪問に先立ち、事前勉強会があり、「ハンセン病」についての予備知識を得ての参加でしたが、現地の方々とどのようなコミュニケーションが出来るのか不安いっぱいでの参加でした。折しも熊本県で元患者さんの宿泊をホテル側が拒否すると言う問題が大きなニュースとなり、ホテル側の対応としてはやむを得ないのかと



長島愛生園歴史館に収められている資料を通して研鑽をつんだ

内容を要約すると次のようになります。
一、現在では良い治療薬がある
ので完全に治る病気であるということ。
二、接触しても健康な成人には
感染しないということ。
三、元患者さんは、後遺症が残
るので、さまざまな偏見に苦しんで
いるということ。

現地でお聞きしたお話の中で印象に残つたのは、裁判で、偏見と差別の根源と糾弾された光田健輔氏を擁護するお言葉でした。私たちは、「生きとし生けるものすべて阿弥陀さまのお慈悲によつて生かされる」ことを教えられますが、世間一般は、まだまだ少なくなつたとは言え、差別と偏見が残つてゐるのが現実です。そして強制収容され愛生園で生活する方々の多くが七十歳を越える今、一方「この歳まで生きてこれたのは国立療養所があつたから」とのお話に様々な視点、思いや考え方があることを改めて知らされました。そして私の今後の人生の中で、なにか私に出来ることはないのか?と考えましたが答えはまだ出ておりません。この答えを見つけるべく、これからもこの問題について考えて行きたいと思います。

四、神經組織が冒されるので治しても日常生活に危険を伴うということでした。
これまで問題意識を持つこともなく、この六十余年を過ごしてきましたが、厳しい差別の現実があることを学ばせていただきました。

